

パネルディスカッション「大人から学生へのメッセージ」

【講師】	レインボープラン推進協議会 委員	菅野 芳秀 氏
【パネリスト】	レインボープラン推進協議会 委員	菅野 芳秀 氏
	新村地区 くれき野生産組合 組合長	岩間 克博 氏
	同組合 食育・有機米担当	北原 明夫 氏
	筑北村立聖南中学校栄養教諭	榛葉 教子 氏
【コーディネーター】	松本大学観光ホスピタリティ学科	白戸 洋 教授

白戸／こんにちは。午後の部ということで、これから2時間ほどシンポジウム、パネルディスカッションということで進めていきたいと思います。たぶん、午前からずっと聞いているし、食事をして皆さんちょっと眠くなる人も出てくると思いますので、午後は、皆さんを寝かさないようなおもしろい話をしていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

午後のパネルディスカッションは3人の方にパネラーとして参加していただきます。それから午前中に引き続き、菅野先生にも一緒に討論に加わっていただくという構成で、進めていきたいと思っています。

最初に私のほうから、パネラーの方々をご紹介させていただきます。後で、それぞれから、もう少し詳しい自己紹介をしていただきます。

向かって右側の榛葉先生です。筑北村にある聖南中学校で栄養教諭をされています。よろしくお願いします。

それからこの新村にあります、くれき野生産組合という…くれきの米というお米を作ったりしていますが…その組合長の岩間さんと北原さんです。よろしくお願いします。

午前中に引き続き、菅野さんにもまた、お話しをいただきたいと思っています。

今、菅野さんのお話を聞いて、私も大変に考えさせられて感銘を受けたのですが、午後は何を話し合おうかということですが、こういうパネルディスカッションとかいうのは、おもしろくなった頃になるとおしまいというのが多くて、なかなか何を話したのかよくわからないことが多いと思います。そこで今日は、せっかくこれだけの方々がいらっしゃるので、一般論として知識を増やすようなお話よりは、特に学生の皆さんがこれから管理栄養士として、食のスペシャリストとして生きていこうとするとき、どんなことを考えて、どんなふうな思いを持って、どういうふうに生きていけばいいのかという、大人からの伝言のようなそんな形で進めていこうかなと思っています。

皆さん、自分のお父さんお母さんから、人生についてまじめに語ってもらったことはないと思います。僕にも今年大学1年生になった娘がいて、うちの娘を見ても、父親が今までどういう思いで生きてきたかをあまり知らないですね。大学に行くときに娘は、「お父さん、そんなことを考えていたの」と一昨年11月に言われましたから、いかに自分の娘にも話していないかということです。親が娘に話すというのは、何となく恥ずかしい気もしますので、今日は、皆さんを自分の娘や息子のように思っていて、お話をさせていただこうと思っています。

テーマとしては、「土・農業・命の循環から食を考える」ということで、進めさせていた



きたいと思います。やり方ですが、だいたい前半の半分は、今日のパネラーの方たちに自己紹介とか、午前中の菅野さんの思いなども含めて話をさせていただいて、後半には、皆さんからも午前中の質問だとか、感想などもあると思いますので、そんなものも含めながらやっていこうと思います。それぞれの方々からどんな話が出るのかは、出たからのお楽しみということで、その後のディスカッションもどのようになるかはそのとき考えるというように、私のほうでコーディネーターとしてやらせていただきます。

ということで、前置きが長くなりましたので、早速始めさせていただきます。それでは、岩間さん、北原さん、榛葉さんの順で、まずは一通り自己紹介。それからやっていこうとすること、あるいは午前中のお話を聞いての思いや感想、あるいは若い人たちへのメッセージも含めてお話しをいただけたらと思います。

では、岩間さんからお願いします。

1. パネラーの皆さんがしてきたこと

岩間／はじめまして。今、紹介いただきました新村に住んで65年になります岩間と申します。よろしくをお願いします。

くれき野生産組合というのを立ち上げて16年になります。その思いをお話しさせていただきたいと思います。ここの学校の前身、新村小学校というのがあったことは、何人かの方をご存知だと思います。この中に校歌があります。「秋は黄金の波をする」というくだりがあります。まさに新村、とくにあまり水に恵まれなかった新村が、米で現在に至っているということがございます。



最初にちょっと、説明したいと思います。今、説明しました経過の中で、兼業農家がいて作った組合というので、常に全員参加で…基本的には全員が参加で…活動しています。27戸農家がございますが、ほとんどが兼業農家でございます。1名が酪農の専門家以外は、他に職を持っています。とはいうものの、年齢的に70歳を過ぎた人も数名います。その方は、当然年金をもらいながら百姓をそれなりにやっているということです。

27名いますが、最初から27名であったわけではなくて、16年前に3人からスタートしました。私の思いをちょっとお話しさせていただきますと、私は結婚して、子どもがいません。百姓をやれと言われて、しょうがなしにやっていたんですが、「この後どうやって継いでいくの？」と親からも言われていましたし、今でもそんな感じは持っています。機械を親から譲り受けたりしてやってきましたが、機械が傷む。今まではお米の値段も少しずつ上がってききましたが、当時、値が下がっている中で、新しいものを買ってどうなるのかなということから、3人で話し合って、ちょっと機械をお互いに共有していこうじゃないかということから、コンバイン1台を買いました。これも中古です。そうした中で今度は田植機を買ったり、精米器を買ったりしてきました。どうせやるなら楽しくやろうじゃないか。それには若い人が入らなければ困るから、後継者を育成するために目標は大型機械を使いながら、良い農産物を生産して、とにかく後継者を作っていこう、我々につながる若い人を入れていこう、それには何か、おもしろいことをしなければならぬだろうということで、今に至っています。

そんなことから、最近よく言われています「食育」ということで、食育もやりながら、ただ、皆さん同じような物を作っていたのではいけないので、何か特別な米を作ってみようではないか、有

機ということになりました。午前中にも話がありましたが、生ごみを使った堆肥をいただいて、我々が自分たちで種を蒔いて、管理をしながら有機の栽培に挑戦していこうではないかとやってきました。そんなことから、ここ数年の間に、お米、有機米を作り、仲間でお酒を1年に1回作り、松本大学さんの白戸先生のいるところとタイアップしていただいて、カップ丼を製品化するお手伝いをしてきた。

味噌と豆腐もございます。これも一昨年から、地元の我々の作った大豆で味噌と豆腐を委託ですけど、作った。これもまた、みんなそれぞれ思いはございまして、全部それぞれストーリーがございまして、追々、お話ししたいと思います。

次。そんなことから、さっきお話ししたように、おもしろく楽しく、若い人が集まるものを何かしたいなということで、今から6年前に、麦刈りというのがだいたい7月の中旬に終わるのですが、これが普通でしたら、秋までいって、何も作らず過ぎていくのですが、空いたところにコスモスの種を蒔いて、楽しもうではないかということになりました。「どのくらいやるだい」ということで、組合員の方に「そんなことしなんで、一杯飲ませろ」という話も出てくる。お金がかかります。おこして、種を蒔いて、畦草を刈りながら咲かせる。そしてコンサートをやったりしているのですが、これをお願いするときにも、それなりのお金がかかる。そんなことを言っても、若い人は一杯飲まただけでは集まらないということで、こういうグループを知っている人が仲間について、紹介していただいて、そんなことをやっていました。

昨年は松本大学の学生の北村さんを中心に7名ほどお手伝いしていただきました。北村さんは長野の方なのですが、トラクターに乗っておこすのを手伝ってもらいました。1回くらいやってもらいたいなという我々の思いです。これが後に続いて、農家にお嫁に行って…こんな事まで考えていました。

とにかく我々のやっているものをちょっと使ってもらって、実際に仲間になってもらうきっかけにできたらという思いもありまして、それでコスモス祭りは、テントを立ててちょっとした物を学生さん自ら販売してもらっています。そんなことで、こういうコスモスもやって6年目です。

バンドもお願いするということで、学生さんをお願いして2日間やりましたが、1日はブラバンド、もう1日は太鼓のお願いをしました。花はちょっともったいなかったのですが、刈っちゃっていいかなという所でしたが、もう学校のグラウンド3枚分くらいありますので、10日間でも問題ない。刈り倒して、そこへステージを運んで、こういう、イベントをしました。現場でバンドや太鼓などをやったのは、去年が初めてでした。

先程お話ししました食育ということですが、地元の小学校の皆さんと一緒に食育、有機米ということで、除草剤を使わないということの中で除草機が回るようにして作ったという事がありました。これも大変でした。かかしも作りました。体育館でみんなで、12回ほど作りました。今の世の中にこんな事が一般的にあるのかということですが、我々の小さい頃、親から見よう見まねでやってきた思いを確認している。

除草機なんていうのも、今、やると、なかなかそういうわけにはいかないが、こういう物があったんですよということを、伝えていく。どんな便利な世の中になっても、こういう事があったんだよという、継承の一つの代表でもあるかなと。除草機の話をしていただきました。

そんなことで、いろいろお話ししたんですけど、27人、みんな仕事を持っています。まさに私の横にいる北原さんは、経済連を40年。それで今、我々と一緒にやっているということです。NTTに勤めているとか、松本市役所に勤めていたり、地元のトラクターの会社の下請けをやっている人もいます。レストランをしている人、農業の専門雑誌の編集をしている人、エプソンに勤めている人、多種多様です。そんなことで、それぞれみんな30年、40年勤めていることで、全ての人が皆その道ではプロの人です。それを何とか自分たちのグループで生かしてもらおうわけにはいかないかということで、NTTに行っている人にはホームページを立ち上げてもらいました。エプソンに勤め

ているひとは、40数年勤めていて、やめた後、1反5畝の田んぼを買いました。それで百姓をやり始めて、我々の仲間に入りました。その人は昔からやっていた人ではないだけに…田んぼを買って百姓をやろうという人であるかどうかはわかりませんが…興味が全く違う。農作業に使う道具も自分で作ると。そんなことで、この人には今、くれき野ガーデンという小さい畑を…市民農園ですね…これを貸し出したらどうかと…井出さんという方が話したので、この人に担当を持たせてお願いして2年目です。2年目でようやくいっばいになりました。

農協に行っている方には…10周年がありました…そのときに、10周年記念誌を編集から写真の取り込みから、ちょっとした修正などをしてもらいました。それぞれの立場でそういう仕事とか、分担しながら、30年、40年やってきたことを今に生かして、まだまだ足りない点がありますが、そんなことでいます。

以上です。

白戸／はい、ありがとうございました。

岩間さんの生産組合は、本当にこの近くにあって、学生とも交流しながら、やっているというお話をさせていただきました。また後で少し、僕のほうからも、質問させていただくこととして、それでは、北原さん、お願いします。

北原／くれき野生産組合で、先程の食育と有機栽培を担当しています北原です。ただいま、明かされちゃいましたけれど、農協に勤めていまして、肥料や農薬で食べてきた立場であります。今はできるだけ使わないようにしようと、今まで学んだ経験を生かしまして、残り少ない30年をかけてみたいと思って、今、農業生産をやっています。

それで、若干肥料の概略を、歴史の中で、肥料がどういう事をしてきたのか、今はどういう状態にあるのかということについて理解してもらうために、資料を用意しましたので、ご説明します。

ここにあるのは、化成肥料の生産できる過程であります。化成肥料を作るには、原油、または天然ガス、燐鉱石、銀鉱石、カリ鉱石が必要なわけですが、ほとんど全てが日本の場合、輸入品でございます。従いまして、化成肥料は、海外の資源からできているということでもあります。

そういった中で、最近の肥料の現状を見るに、世界は今、どういう動きをしているのかということでもあります。皆さんご存知のように、世界的には、近年ますます人口のが増えていきます。日本は横ばいなし、減少傾向になったわけですが、世界とすれば、人口が増えている。したがって、その人たちが生きるためには、農業生産、作物生産が必要なわけであり、肥料の消費量が世界的には、どんどん増えている。その中で、日本は横ばいなし、若干減少傾向ということで、化成肥料そのものを使う量が減ってきていますし、耕作面積が減っているというのが現状です。

そういう中で、肥料の原料価格の値上がりの推移についてみますと、2～3年前から急激に人口動態、食糧不足状態があり、肥料価格が値上がりしている。燐鉱石の価格は、数年前より4倍、5

倍というような伸びですかね。それから、尿素。尿素そのものは若干価格が下がっている。塩化カリは若干上がっている。要するに、塩化カリなどの原料が上がっているということです。原料価格がそのまま肥料価格になりませんから、肥料価格の高騰というのは、日本ではそんなに極端ではありませんが、昨年あたりから5割、6割の値上がりがありました。また、ごく最近では、円高傾向ですので、輸入原料が有利に輸入できるということで、若干また値が下がって



いるという感じです。

今、申し上げました価格の値上がり要因ですが、さきほどの燐鉱石やカリ鉱石は原産国が限られているわけです。かつて燐鉱石は、アメリカあたりから輸入されたわけですが、アメリカが食糧増産問題なり、資源の問題があって輸出をしなくなった。それから最近では、中国から基本的には入れているわけですが、その中国も自分の所の食糧増産がありまして、肥料の輸出を極端に抑えたというような…関税が100%ですかね…要するに2倍になって日本に入ってくるというのが、現状でございます。

今は肥料の現状を申し上げたわけですが、植物が育つためには、微量元素も必要です。一番大事なのは、窒素、リン酸、カリ、それが基本的に投入されながら、作物を作っていきます。

一般的な本を読みますと、窒素、リン酸、カリがあれば、基本的には農作物はできるのではないかと資料はありますが、いろんな傷害、生育傷害は、こういった微量元素もほどほどにないと、健全な農作物ができないのが現状でして、今では、窒素、リン酸、カリとは別にこういう微量元素も肥料として取り入れるという農業生産の現状があります。

先ほど申し上げましたように、肥料価格が上がっていった場合、日本の農業というのは、当面やっても、やがてボツになるという不安要素があります。従いまして、午前中の菅野先生のお話でもありましたが、私は地元の有機物、畜産堆肥、また生ごみ堆肥等を農産施設にいかにかせられるかということで、こだわりをもって手がけてきているわけです。子どもたちの食育では、学校の給食残渣を堆肥化したもの。今、松本市の場合は堆肥化施設がないわけですし、昨年まで木曾に広域の堆肥化施設があるので、学校給食は木曾に持って行って堆肥化していたわけです。今年から、その学校給食残渣も公設市場の中でえさ化をしている。そのえさ化したもので、畜産をしているのが現状で、堆肥とはならない。松本の子どもの給食残渣は堆肥にならない。

以上で、私がやろうとしていることとお話しました。また、教育場面を通じてこういうことをして、まさに午前中の菅野先生のお話の思いの通りですが、なかなかそれに手が出ないということですね。もう3年ほどになりますが、新市長誕生の時に手紙を書いて、松本にも堆肥場を作ってくれと出しましたけれども、松本市はそういったことにはなっていないと回答が帰ってきました。以上です。よろしく願います。

白戸／ありがとうございました。では、次に榛葉さん、願います。

榛葉／先程、ご紹介いただきました聖南中学校で栄養教員をしております榛葉と申します。自己紹介ということで、少しお話をさせていただきます。

私は、栄養教諭になりまして2年目です。それまでは学校栄養職員という命を受けて、学校のほうに25年くらい勤めておりました。長野県が19年度にはじめて栄養教諭を5名採用しました。私は20年度採用ですので、そのときは16名で2期生になります。何もわからない所へ入っていきまして、食育…皆さん、今では「食育」と言いますが…具体的にはどういうふう子どもたちに給食を通じて食育を自分のものにしてもらうかということをごく考えました。皆さんの中にもいらっしゃるわけですね、栄養教諭の免許を取って卒業されて行かれる方が。午前中に、菅野先生がお話してくださいました中に、私もとてもそうだなと思うことがありました。

皆さん、覚えていますか。夢を叶えること4つ。1つは具体的な設計図を書きましょう。それに向かってにこにこ。それを常に思い出しながら、一歩ずつ行く。私がまさしく、ゼロの…まだ食育というのは何もなかったのですが…その中で、法律も生まれまして6つのことを子どもたちに下ろしていこうとスタートしたわけです。その設計図。そして先生は「熱意」とおっしゃいましたが、私はいつもこの中に「熱意」「太陽」「気力」と。自分がつぶれそうになることがあります。何も見えない中で、どういうふうやっていったらいいんだろうと思ったとき、やはり「熱意」を持っ

て話す。そうすると何となく…わかってくれる人とわかってくれない人がいますが…なんとなく行くかなという、何となく響いていくかなと。

そして、2に「誠実さ」とおっしゃいました。本当に誠実にやること。それって確かに時間はかかるかもしれませんが、誠実さというのは、伝わっていくと思います。

3つ目、共同でやるときには、自分の利益をあとにする。そうだと思います。まさしく共同でやること、みんなでやるのが、互いに、一緒にやってきた「他」をほめ、「他」を認め、自分はその中にいても陰で良いと思っていたりしました。

4番目。笑顔を見せて。そうなんです。私は、笑顔はね…困ったときに笑っちゃったりしていけないのですが…笑顔で。笑顔って良く、昔の言葉に「何もなくても笑顔はなんせ」という言葉がありますが、笑顔を他に与える、その中から四角張ったものが、なんとなくきり碎かれていくんだと。

4つともすごいなと。ただただ私はやってきたのですが、ちゃんと分析して4つにまとめられた菅野先生はすごいなと思って、私はメモしました。

そういう感じで、私は先程の課題が、子ども…私の子どもに私の生きてきたことを言っていなかったんで…そういう観点で、皆さんに話していきましようという課題ですので、そうしたら、本当に話しやすいなと思いました。私も子どもが2人いまして、ちっとも話をしていなかったと思いました。この3月に下の子が社会に出ますが、私と同じ仕事はしませんが、本当にそういう思いで、皆さんに語っていきたくと思います。

先程から「土」ということが話題に上っていますが、私も地域の直売所からお野菜をいただいて、子どもたちもおいしいと言っています。それで食育はおいしい給食からと、私はいつも調理員さんに言います。調理師さんと私は子どものために、子どもが将来健康になるためにという同じ目標を持っています。でも、意見が時々違うときもあります。それで、今はとても恵まれた100人程度の給食ですので…とても恵まれて、調理師さんもとてもすてきな方たち2人、それから臨時さんが1人来てくれますが…その中で私の思いというものもしっかり伝わっています。今日みたいに出てきていても、子どもたちのために作ってくれますし、私が調理師さんから教わったことは、釜の置き方ですが、調理師さんが「おしくな〜れ、おしくな〜れ、と作るんですよ」と言われたのです。私はそれを「いただき！」と思いました。すごいことをいうんだなと。それがやはり心を込めて作る。それが誠実だと思うのですが、それが子どもたちの所へ届く。そして私がその給食を元にしてお話をします。それが食育になっていくのです。決して失敗がないわけではないです。しょっぱくなっちゃったりとか、たれちゃったりとか、ちょっとしたミス。良いはずだった温度設定が高すぎたこともあります。でも、子どもたちに、「ごめんね。ちょっと今日はしょっぱくなっちゃった」というのですが、「ううん、大丈夫。白いご飯だから、たくさん食べられるよ」という返事が返ってきたりして、まあなんて良い子たちなのでしょうと思うのです。

たぶん、皆さんもこれから社会に出たときに、こんなはずではなかったと…私もこの仕事27年、今はそうでもないのですが、1対12という時がありました、1は私ですよ。周りはみんな反対するわけです。そういうことも、やはり目的を伝える…友達のために、じゃあ私はこういう思いでやりたいということを伝えます。いろいろあると思いますが、私はそういうときは、「ピンチはチャンス」だと思います。ピンチは、私はこれは絶対チャンスにしようと思って越えてきました。

O-157のときもそうですし、停電になってしまったこともありました。もう2000食くらいのところで、雷が給食センターの電気を起こしていたところ、発電機のところに落ちてしまって、そのときもこのピンチをどのように乗り越えようかと。そのときは、でも結束するのですね、調理師さんと。どうしたらいいと思うと。だから、メニューもみんな変えて、たまたまカレーが倉庫にあって。そういうときはすごいですね。私を入れて13人。子どものために知恵を出すのです。そうしてやってきましたが、是非皆さんも、困ったら助言者、どうしたらいいと聞ける人を持っていてください。自分1人で悩まない。是非それを、子どもにいうような思いで、伝えたいと思います。

やろうとした理由、くじげずにやることができる理由

白戸／ありがとうございました。

ひと通り、お3人の方から少し自己紹介を兼ねてお話しいただきましたが、これから僕のほうで、質問を交えながら、話を進めていきたいと思えます。最初にお3人とも、食、あるいは農業、あるいは地域というものに、ものすごい理想を持っていらっしゃるというのは、皆さん、わかったと思えます。たぶん、今日の午前中の菅野さんの話でも、そういうようなお話がありました。しかし、一方で北原さんがちょっとお話になったように、この問題は…今日の朝からあるような問題というのは、地域だけではなく、日本全体、あるいは世界全体のいろんな問題と結びついていて、解決というのはすぐにはなかなかできない。しかも自分1人の力で何かをしようとしても、なかなか変えられない。ものすごく大変な問題ですね。

僕は3人の方の話を聞いていて、どうしてそんなに大変なのにやろうと思ったのか。あるいはやってみてくじげそうにならないのか。今、ここにいる学生の皆さんは、これからそれぞれ栄養士になって頑張っていこうと思っているのですよね。でも、岩間さんにしても北原さんにしても、どうして勤めを持っていてやっているのに、どうしてそんなことを考えてやり始めたのか、そのへんの思いというか、あるいはその中で、やってもやってもなかなかうまくいかないところもおありかと思いますが、その辺の所を少しお話しいただきたいと思えます。まず北原さんに一つ。

僕は率直な疑問なのですが、農協で肥料を売っていた側からいきなり、買う方に回った中で、どうしてそんなことを考えたというとおかしいですが、どんな思いからそれをやられているか、何か直面した壁のようなものがあれば、お話しいただければと思えます。

北原／肥料を自分で売りながら、肥料の勉強をしていく。流通を学んでいく。その中では、たとえば先ほど申し上げましたように、資源としてみんな日本のものではない、かつては…その化学工業が発達していた頃は、日本で尿素などを作っていたが、最近はその尿素も中国から輸入している。そういった輸入資源、大きくみれば先程言った石油関係、今は食糧自給率が50%くらいのエネルギー関係、50%くらいの魚から肉から飼料から我々の食べるものなど、60%くらい輸入しているわけです。それを実際消費するのは、最近はわかりませんが、少し前なら、宴会をすると30%くらい食べるけれど70%くらいは食べ残しで捨ててしまう。それを消費として買って来た燃料で燃やしている。要するに、二重三重にも無駄遣いをしていることになります。従って、資源のない日本が、いつまでもそんなことで続くのかというふうにして、話の通り、生ごみも使えばいいんじゃないの、畜産の糞尿も使えばいいんじゃないのと、できれば人間の糞尿も使いたいのですが、今は下水で臭わないように、見えないようにして、逃がしてしまうわけです。下水に流れると、いろんな糞尿排水が入りますので、重金属を当然含む可能性もありますので、それをまた肥料にすることはできない。

そんな思いから、やはりいつまでもこんな農業は続かないな、肥料をただ売ってれば良いというものではないなと。現職中でも、組織を挙げて堆肥工場を造るべきではないかという話をしたのですが、なかなか認めてくれない、理解してもらえないというのが現状でして、何年も過ぎました。

そして自ら、化成肥料をできるだけ使わない農業を自分でやってみようということで、仲間でも半数の面積が生産に…米中心でやっているということです。

白戸／たぶん皆さんは、あまりわからないかもしれませんが、農協の中で肥料を使わないということをするというのは、大変なことだと思うのです。しかもそれを、自分で始めたということですね。そこのところは、すごいなと思えます。またちょっと、後でお聞きしようと思っています。

岩間さんはお勤めをやっていらっしゃって、10数年前から始められたと思いますが、あまりその苦労しようなんて人間が思わないことを、わざわざやっていなかったことを、どうして始めたのか、というところをお話いただければと思います。

岩間／先程お話ししたように、跡継ぎのことがまずありました。それと、機械がどうしたものかと。そういうことから、やむなくしたところが、3年ほど経って…14, 5年経って、そして今現在20数年になっています。

思いは、聞いてみたら皆同じなのです。それでも、農地を買ってという人もいます。地元で養子に来て…結婚で養子に来て…今までは大きな機械を持っている人にやってもらっていたということですが、仲間ができて、うちの息子、うちの婿さん、一緒に仲間に入れてくれないかということで、そういう話になったという人もいます。おじいちゃんが私のところに来まして、やったことがないがいいかということで。百姓をやっているのは、ほとんどの人が、3分の2くらいの方が機械を使っているよと。それがこういう仲間です。やるとなると、田植えだ、稲刈りだと、みんなができるようになった。心配しないで良いですよ。お互いに知恵を出し合っていますよということ。さっきの10周年記念誌の中ですが、うちの1枚しか田んぼがない、こんなのどうしようかと、息子もやらないし、ということで10周年記念誌に、市村さんというおかあさんが書いてくれました。それがまさしく本当に地域、田舎なんです。やってよかったなという思いです。

そんなことから、こちらから積極的なお願いとかをして、困った同士が集まったということに行き着くかなと思います。みんな、いろんな物を作りながら、安全に。3年前に起こりました、良いと思って食べていたお米が事故米だったとか、汚染米だったとか、そういう心配のない米であったり、豆腐であったり、味噌、醤油であったり、そういうことが、一つの気質になりました。

これもまた一つ、思いがありました。我々、小学校、中学までのころですか…うちの近くに採取田というのがあります。種は農協からほとんど買っています。それが自家米で保有しておいて、その種を蒔いて、大根もなすも瓜もみんなそうだと思います。米も同じです。それを自家採取する水田が、小さい1反3畝、それをみんなで地域ぐるみでやっていた。田おこしから稲刈り、脱穀、それをみんなでやった。すぐ隣近所でやるとは、味噌醤油は、隣の家で作った…という思いが、我々の年代まではありました。そんなことで、汚染米ではないですが、その恐れがない物ということ、やはり我々の地域で自分で作った物で、自分で食べれば問題がないじゃないかということで、皆さんの、組合員の中にみんな同じコンセプト、思いがあって、つながっている。土曜日、日曜日、休日で休みたいなど思いながら、手を貸していただく。一緒に参加していただく。

他の組合では、20人、30人の仲間がいますが、機械の担当者は誰と誰と誰、稲刈りは誰と誰と誰というように、数人でほとんどをやってしまうということが、大方の組合ですが、我々は参加するからには、積極的に参加することが目的ですということをもって、始めています。参加しない人は、ちょっと日曜日でも、何か特別な用事、冠婚葬祭もしくは行事ですか、何かそういうことがない限り、出てきていただける体制です。

また、知恵でやりたいなど思っていて、発足当時は、トラクターを借りたいな、苗を買いたいな、格納庫を作りたいなという思いがあって、市に相談、長印に相談、県会議員さんに相談いたしましたが、却下されました。今はそんな時代ではないので、そんな予算はございませんと。わかりましたということで、中古のコンバイン、中古のトラクター、そういう物から、もてる範囲の物から自分で自立できる、他の力を借りない、とにかく自分でやれる範囲でスタートしようということでした。今、補助金をいただいているのは…食育事業という市のものがありましたが…国の補助事業がありましたが、去年のコスモスのお金を初めて市役所から10キロ分、種でいただきました。市にお話したら、おもしろいですね。今、こういう事業に出るお金はあります。「種でいいかい」と。「はい、種で結構」ということで、種でいただきました。

また、大学の白戸先生とも1年前からの付き合いですので、せっかく地元こんな良い大学がありますので、大学の力を借りたいなど。我々は40年、50年、親の姿を見ながらやってきたが、もう我々の力だけでは何か限界に近いなど。何か新しい、若い者、大学の学生の皆さん、先生の力をちょっと、どんな知恵があるか、一緒に仕事の中で生かしてもらえるものがあつたらと、相談にちょいちょいお邪魔させていただいて、それが一つのことになって。思いというのではそんなことです。

白戸／ありがとうございました。

僕も8年くらいお付き合いさせていただいていますが、くれき野生産組合というのは、たぶん田んぼを耕して、減農薬有機のお米を作っているだけではなくて、地域を耕して地域を通してなんとかとか…実際にこの地域も、先程ちょっとありましたが、新村というのは、全国でも有名なお米の穀倉地帯です。梓川から水を取って、豊富な水を持っています。この人たちは、水路の掃除をしたことがない。水争いをしたことがない。

「ものぐさ太郎」の伝説がここにありますが、要するにその時代からただ寝転がっていても白いご飯を食べさせてもらえるような、豊かな地域だったわけです。ところがこの豊かな地域であっても、米粒日本一が3回も出たような地域であっても、今、後継者の問題とか、皆さんはだいたいわかると思いますが、田んぼや畑がいろんなもの変わっていくという中でどうしていくのかなと、必死になって取り組まれているんだと思います。その中で、今のような模索も兼ねているということだと思います。

では、榛葉さん、もう一度お願いします。

榛葉／その土のことですが、それで土というのは、今回テーマで、そこに食がありますが、うちの学校の給食は、すぐ近くに、ちょっと隣村まで入れますと4カ所も直売所というものがあります。いろんな所からいただきますが、一番遠いところの直売所が週2になります。それがどうしてかといいますと、さっきからのJAさんということが出ていますが、JAさんから、そのとき言われたときには私はショックだったのですが、あとあと考えてみたら、給食のことを考えて下さっているんだなと思ったのですが。JAさんが、「喜んで直売所の野菜を買っているようですが、JAは何回もチェックをして、安全な農薬を使って出しているの、値段が高いんだよ」と。だから、そんなに遠くの直売所からわざわざ買って、安いからと言って買って、安全なのですかと。質問を受けたのです。

前の学校ですね。私は、すぐには答えられなかったのですが、直売所のお店の方にそういうことはどうでしょうかということで、聞きました。そうしたら、大丈夫だからということで、では、私たちは、検査をするとか、そんなことはできないのですが、安全安心ということで子どもたちに提供しています。それが売り物なので、是非その所をよろしく願いますということで、お願いして、信頼関係の上でやっています。別に何月何日に検査したとか、そういうことはないのですが、でも、さっきの誠実もそうですが、こちらで誠実をお願いして、相手も誠実に答えて下さる。それを私は信じて、時には農協さんをお願いしたり、近くの今までと続けていたお店からも買いかやっておりますが、その土といいますか、土って本当に大事だなと思います。

私事になってしまいますが、一緒に住んでいる父が87歳、母が85歳で、夫で、娘たちは今一緒にいません。外に出て働いているものと、学生なのですが。年寄りが2人です。母はまだ野菜作りをしています。松本市なのですが、最近合併した旧四賀というところに住んでいまして、有機の肥料、こちらは鶏糞の肥料をいただいて、田んぼにあけておいていただいて、それを、うちはそれこそ兼業農家、先程岩間さんがおっしゃったのですが、私が1日だけはお百姓を手伝います。1日は私もちょっと、本業の職業のこともあつたりして、出張が…日曜日に勉強しに行ったりしているので、1日は自分のためにほしい。1日は手伝うと。主流ではないです。今、一生懸命教わっていますが、

私の夢は、やめたら有機肥料でおいしい野菜を作って、売れませんが、皆さんに食べていただきたいというのが、私の夢です。

私は、実は27年…子どもに話すような、もし心に残ったら覚えていて下さい…27年やっていますが、最初の計画的、具体的な計画というのが、不備で、私はすぐにこの職には就けませんでした。就きませんでしたではなく、就けませんでした。今は、いろいろ問題があって一生懸命やっていますが、なかなか難しいのですが、当時はいっぱい就職口があったのです。実は、本当のことをいうと…これは子どもにも言っていないのですが、実習に行ったときに、ものすごいショックを受けて、病院実習だったのです。今は、先生、病院実習をするのですよね。学校実習、保健所実習。それで病院に行って1週間やったら、ダウンしてしまって、こんな大変な仕事はやりたくないと思ってしまったのです。淡々と友達は就職試験を受け、キッセイ薬品みたいな、栄養士でもそういう会社に行く人もいましたし、ハウスとか、食品の会社に行く人もどんどん決まってくのに、自分は全然決まらず、3月に試験を落ちました。今でいう、ちょっとアルバイトなんかをしていた時期がありまして…ちょっと会社に勤めたのですが…具体的設計図がなかったなあと。

でも、何年間か…3年間くらいだったかな…そのときに、私は事務をしていましたが、この社会に入ったときに、無駄ではなかったと思ったのです。その3年間、私が何を教わったかといいますと、電話の出方、言葉の使い方、お化粧の仕方も、昔はあったんですよ。今は信じられないかもしれませんが、昔、窓口は、会社の顔ということで、化粧もしっかりしなさい。きつくしなさいということではないですよ。しっかりしなさいということ、ちゃんと勉強しましたので、無駄ではなかったなと思います。

だから、皆さんも、こんなことをしていてどうなるんだろうと思わずに、やってほしいなあとあります。ストレートに行かればベストですよ。栄養士、栄養教諭にしても、すぐに学校に迎えられるらベストですが、いろいろな方向がありますので、1回では試験も難しいです。是非頑張っていたいただきたいなと思います。

白戸／はい、ありがとうございました。

だいたい前半、終わるところですが、たぶん皆さん聞いていた中で、どうしていろいろな話が出てくるんだろうと不思議に思っている人もいると思います。実は、今日ですね、始まる前に廣田先生に今日のこの趣旨はどのような事ですかとお聞きしたときに、一つは、理論とか知識はまた授業とかいろんな形で勉強できるんだけど、思いを持ってほしい、思いを伝えてほしいということがありましたので。それが一番だと思うのです。実際にやっぴり方々が、どういふ思いを持ってやっぴりかということ、直接話していただくということで、僕のほうから、一人称で「私は」ということで語って下さいということで、お願いをしました。

それからもう1点は、栄養という勉強をされているのですが、今日の話は栄養だけではなくて、たとえばもちろん午前中の話にあったように、農業とか土のこと。そういうことも知らなければならぬ。もう1つは、地域のこと。地域の話も出てきました。もっといふと、人と人とのつながり、コミュニケーション、そういう物もすごく大事だよという話も、前段話していただいたと思います。

そういうことをですね、少しまずは素材として皆さんに伝えた上で、ちょっと後半はもう少し突っ込んだ話をしていきたいなと思っています。

これまでのところで、菅野さんのほうで、もし何か大変な無茶な振り方だと思われていますが、何かコメントがあれば、お願いします。

2. 人生の先輩として伝えたいこと

菅野／つまり、一人称でと先生はおっしゃいましたが、要するに大人になってから、七転八倒を暮

らそうではないかなと言ったんですね。つまり、生き方ということなのだと思いますね。

俺も実は、生き方がなかなかわからずに、ある種七転八倒した思春期があったのですが、そのとき気づいたのは、一寸法師と桃太郎というところに主要な原因があったということに気がついたんですね。一寸法師、桃太郎症候群という言葉を作ったんです。つまり、桃太郎は鬼ヶ島に行って宝物を得て、荷車に満載してふるさとに帰ってきたとき、おじいちゃん、おばあちゃんが「良かった、良かった」と迎えてくれましたよね。その宝物を使って、橋を架けたとか、トンネルを掘ったとか、農地を拡大したとか、村の人たちを幸せにしたとかって、何もその後の物語はないよね。つまり桃太郎が、お金を使っていかに生きたのかという話はないんだよね。

一寸法師だけど、京の都にお椀の船に乗って出かけていって、鬼を退治して、その縁で京都の偉い偉いお役人様になりました。お役人様になって、その力を活用しながら、地域にどう貢献したかというようなことについては、何もないんだよね。

君らはどうか知らないけれど、俺たちは、桃太郎の話とか、一寸法師の話は何度も何度も聞いてきたわけ。そうすると、さながらね、人生の目的が地位を得るか、それからお金を得るか。それでもうOKみたいな。それでOKなんだよ、良かったね、その人生、地位を得たもんね。良かったね、その人生、お金を得たもんね、みたいな感じで、OKのような感じに勘違いしてくるんだよね。いかに生きるかみたいなことを、俺は小学校、中学校、高校を通して何も考えてこなかったし、学んでもこなかった。でも、どこかで、お金かな、地位かなと、そんなことしか思ってこなかったということの結果が、そのもの、俺自身の七転八倒なことになっていくわけです。

今日の、私も含めてですがパネリストの皆さんも、目の前の地位の話なんか全くしていないでしょ。こういう現実の中で、どう応えようとしてきたのかという話をしていますよね。つまり、生き方というものが、我々、全てそこが筋になっているでしょ。だから環境が変わって、例えば、別なところに暮らしの場を求めていたとしても、おそらくその場でいろんな事を考えながら、いろいろトライされてきたと思うのです。そのことがその方の人生の楽しさを作り、またある種地域社会への貢献というものを、そこを軸にしながら創造してきた。そういうことだと思うのですよね。廣田先生が、まず学生諸君には「目先の利益ということよりも、夢や生き方というあたりの事のところまでこだわって、それで社会に」というようなことを願っておられたかと思うのです。生き方というのは、ある種社会への参加の仕方ということでもありますので、個性ある君たちなりの生き方、参加の仕方をこの学生の間と考えられて、考えられて、悩まれて、取り組まれたらいいなと思いました。

年齢を感じさせないですよ、皆さん。やはりそういうもので、おもしろく、岩間さんは先程から、「楽しく」とか「おもしろく」とか、「人に頼らず」「自分たちで」とおっしゃっていますけど、実にお若い。やはりそういう生き方をされてこられたからだなというふうに思いました。

白戸／はい、ありがとうございました。

ここで少し、学生の皆さんからコメントというか、午前中の話も含めて、感想をちょっと、あるいは質問でも良いので、聞いてみたいと思います。

では、よろしくをお願いします。

学生／健康栄養学科の雨宮と申します。今日はありがとうございました。

菅野先生のお話を聞いて、野菜を作るときは土が弱ってしまうので、同じ野菜の連作をしないというやお話をされていましたが、うちの祖母も小さいのですが畑をやっております、そのときに祖母からも同じようなことを教わりました。その背景には、土の循環というものが必要だったんだなということを、今日、先生のお話を聞いて感じました。

スーパーなどで気軽に買える野菜とかも、その後ろには作ってくださった方々がたくさんいるん

だなどということを感じながら、これからも食材を無駄にせずに、使っていきたいなと思いました。
ありがとうございました。

白戸／他にはどうでしょう。質問でもいいですよ。

学生／健康栄養学科3年、落合です。本日は貴重なお話をありがとうございます。

栄養教諭の榛葉先生にお伺いしたいのですが、栄養士が働く所は、病院とか、高齢者施設とか、行政など、いろいろあると思いますが、学校の栄養士さんということで、選ばれた一番の理由を教えてくださいたいのですが。

榛葉／私は、正直にいうと、受けるときに行政と学校と迷いました。同じ日なので、どちらかを選ばなければなりません。それで私は、3月に1度落ちてしまいました。実は家庭科の教諭で受けたのです。3月の最後の最後で落ちてしまっていて、それでアルバイトとか、会社に入ったのですが、やはりあきらめきれない部分もあったりして、では、子どもを対象にできて、私は栄養士の免許も持っていましたし、栄養士で学校に勤めようという最後の決断はそこでした。

学生／ありがとうございます。

もう一点よろしいでしょうか。菅野先生のお話で土がすごく大事ということで、学校で実際に総合学習の時間などを利用して、実際に子どもたちが土に触れたりとか、作物に触れたりとか、そういうお時間はあたりするのでしょうか。

榛葉／総合学習の時間が少なくなります。今は、従来どおりの時間でやっているのですが、来年以降、その後はもしかしたらなくなってしまうかもしれないのです。ですが、技術家庭科の時間というのがありまして、そこで野菜づくりという時間があります。そこをうまく利用して、給食に入ってくるのだと思います。

実は今、うちの子どもたちが、生徒たちが作ってくれる大豆とか、カボチャとか、トウモロコシなどを給食に使っています。それで、そのときはやはりただ黙って出せばわかりませんので、必ず3年生が作ってくれたお芋とか、2組さんが、2組さんは特殊学級ですが、2組さんが作ってくれた大豆ですとか、必ず紹介をつけてあげないとその材料がかわいそうかなと思って、紹介しています。

学生／ありがとうございました。

白戸／他にございますでしょうか。

岩間／先程、連作障害の話がありまして、なすなど、様々な植物を作り続けると起きる…。

堆肥を入れるといろんな微量要素が入るものですから、連作障害ができない。ただ、その化成肥料で、微量要素なしだと、作物によって、微量要素を好む種類が違うわけです。従って、それを作り続けるとその微量要素が少なくなる。従って、その障害が出るというのが、実際にあります。私もミニトマトを作っているのですが、その茎が枯れたらその茎をまた破碎して、そこにまた戻して、従って、その土壌からはトマトの実だけをいただくよと。実をならすための茎が成長するための要素、そこに突き刺して、吸い上げるという、自然の大きな還元。そうすると、そんなに問題にならないかと思います。

白戸／他にありますか。

学生／健康栄養学科の3年の山口と言います。

菅野先生のお話で、質問させていただきたいところがあるのですが、地域が一丸となって生ごみを回収して堆肥を作るというお話でしたが私たちのような若い世代の人たちが、単身で生活していると、地域の事情がよくわからないのですけれども、そういう人たちに協力を得るために、家庭…家族から離れた新世代の人には、どういうアプローチをされていたのかなということを、もしあればお話いただきたいと思います。



菅野／はい、 どうもありがとうございます。

単身でアパートに住んでいる方は、ほとんどいらっしゃらないですね。家族というか、若い夫婦という方は結構アパート暮らしをしていますので、その方々に絞って申し上げますと、その方々に直接話しかけるということはありませんでした。今、その方々がどのように参加しているかといいますと、もちろん多くの方々は、生ごみを分別して、レインボープランへの参加ということをしています。他のもっと年齢の上の層の人のほうが比較的参加率は悪いです。実はうちの息子夫婦も町でアパート暮らしをしています。息子は我が家に農作業をしに毎朝7時に通ってきます。そのお嫁さんは、町の会社に勤めているわけですが、その嫁さんが生ごみを分別しているかという、していない。

自分の親父がそういうふうにごだわって町づくりしているのに、何をしているんだよという気持ちが、またあるんだけど、良く聞いてみたら、さっき生ごみを分別するための、分別したあとの、網バケツ、二重バケツを映像で見たでしょ。バケツの上にザルがのっている。アパートの構造からいって、あれを出した後、洗うところがないんだって。それでお風呂場で洗ったんだって。洗ったあとのお風呂場が汚れたようになっていくでしょ。その掃除もまた大変だというアパートの構造が、レインボープランに参加するようになっていない。

ごみの収集所のところに、水道設備があればいいのにと聞いていたのを、聞いて「なるほどな」と思いました。

最近、保健所の方々が、若いお父さんお母さん方を招いて、赤ちゃんの育て方とか…保健婦さんか…栄養士の先生がいますよね。その方々が、若いお母さんたちに対して、こういうものを食べなさい、こういうものを食べさせなさい、こういうものと、一生懸命指導します。そういうときには、いつもレインボープランの資料を取りに来ていただいて、レインボープランの作物を、さっきのピーマンのグラフなんかを見ていただきながら、「こういう作物が大事なのです」と、一生懸命若いお母さんに説明しているみたいです。

それから女性団体。消費生活者の会とか、食生活改善推進協議会とか、婦人会が私たちの町にもあるのです。その方々がレインボーちゃんの冒険という紙芝居を作り、若いお母さん方が集まる学校のPTAとか、あるいは保育園とかに招かれて、そういう紙芝居を見せたりしています。

その成果があって、そういうアパートの環境があまりにも参加できるようにはなっていませんが、そんなに落ち込まずに参加されているのかなと思います。

答えになっていませんが、今のご質問でそういうようなことを思いつきました。ちょっと、言葉足らずかもしれませんが、申し訳ございません。

白戸／ありがとうございました。

学生さん以外で、ご意見ご質問がもしあれば、是非、学生たちへのエールも含めて、頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

もしなければ、こちらからご指名をさせていただき、心苦しいのですが、草野さん、ちょっと何かあれば、是非お願いします。

フロアの参加者／私は農家に生まれて、親たちの農作業を見ていて、全部、どんな物も土に返していたのに、実は公民館で市政を知る講座で、生ごみでも何でも燃やされてしまうというのを勉強して、本当にびっくりしました。これがものすごい税金がかかっているということで、これをなんとか土に返す方法はないだろうかということで、女性団体に呼びかけたりするのですが、やはり面倒なことは人間しないのです。市へ出すのが一番楽だから。

それだったら自分でできることをしようと思ひまして、近所の休耕田を、「5畝」というのでしょうか、1反歩の半分です。それを借りてそこへみんなで生ごみを埋けたり、花を作ったりして、生ごみを減らす…そういう運動をしています。

今日の講演を聞いてとても良かったなというのは、今度から他の人に説得するのに、こういう点があるから、こういう事があるからと、皆さんに説得できるから、今日来させていただいて、本当に良かったと思っています。以上です。

白戸／ここから、大学から割と近いところの道路端に、ごみをリサイクルして畑をやって、花を植えたり、ピオトープを作ったりされて、「ごみおばさん」でしたっけ？ 自称。もう20年くらい前からやっていたらっしゃるのですが、そういう地域の中で、自分でまず行動をしている人が、まだまだ皆さんの周りにいるのだと思います。今日のパネリストになっていただいた方もそういう方々ですが、そういう人から学ぶことも、大学での講義から学ぶことと同じくらい、それ以上に、すごく皆さんにとって価値があるかなと思います。

後、残り30分くらいになりましたので、少し絞りたいと思います。僕がどちらかという、地域づくり、町づくりが専門なものですから、そんな観点から、視点を変えて、皆さんのご意見を聞いてみたいと思います。今日の午前中の菅野さんの話の中で、いくつか僕のほうで「あっ」と思ったことがあります、その中で一番僕の中で「あっ」と思ったのは、いわゆる菅野さんたちの取り組みが、行政から始まったのではなくて、1人1人の思いや行動から始まってきたことといわれたことです。今日、パネリストできていただいた方たちも、例えば市の事業として何かをやったとか、市の計画に基づいて何かをやっているとか、誰かに言われたからやっているのではなくて、皆さんそれぞれ自分たちの思いの中でやっている。榛葉さんも先程週に1回農業を自分でやっている。

こういういくつかキーワードとして出てきた中に「自立」というキーワードがあったと思いますが、そういうことがすごく大事なのかなと、僕自身は思っています。というのは、僕はかつて大学を出てから10年ほどコンサルタントという仕事をしていました。海外に行って、海外の農村計画というのを作っていました。日本の援助で。タイとかフィリピン、マレーシア、アフリカの国々に行って、この農村をどうやったら変えていけるか。道路を造り、水路を作りという計画の策定の国際協力事業団の専門家として僕が働いていました。そんな中で、あるとき、キュウリ1本、米1粒作ったことがないことに気づきました。僕がです。キュウリ1本、米1粒も作ったことがない人間が、農村に行って農村の村づくりを話す。これはすごくおかしいなと思いました。そのときに、一つ気がついたのは、自分がやっていないことは、人には話せないということです。

たぶん今日の話の中にもあったように、自分がまず行動して、それを人に伝えていくということだと思うのです。その辺のところ、今日の話の中にも幾つもありましたが、特にその中で重要だ

と思うのが、「地域」と皆さん言いますが、地域とは、場所があるわけです。皆さん1人1人が生きていて、それが集まって、初めて地域ができる。僕はずっと地域づくりに関わってきたのですが、地域のことを考えてよく眠れない人はいないですね。皆さんどうですか。日本の食糧問題や、農業問題について考えて、夜眠れなくて困っている人は、たぶんいないと思います。この地域が将来が心配で眠れない人はいないと思います。いないということは、あまり必要ないということなのです。では何が必要なことでしょうか。眠れないことってありますか。皆さん、どういう事ですか？眠れないことって、たぶん自分のことだと思います。自分が困って自分が行動するから、自分が変わり、それが集まっている地域が変わっていく。そういう物の見方というのが、その部分が重要だし、たぶん菅野さんがやってこられた活動というの、今までパネリストの皆さんがお話になっている活動もそういうことです。一つの話は、決して派手でもないし、例えばテレビで全国に取り上げられるわけでもない。でも、そういう小さな自分の目の前にある問題を、しかも自分の生活の中で楽しくやっていく人がたくさん増えていって、それが相対となって広がったときに初めて、地域が変わり、社会が変わり、世界が変わっていくと思う。世界や社会や地域というのは、誰か上の方から変えるのではなく、1人1人が変えていくのだと思います。そんなことが僕自身が今日の話の中で学んできたことですが、そういう意味で、もう一度パネリストの皆さんとそれから菅野さんですね、具体的にこれから何をしようとかいうことをもう1つ…今までやってこられた話は話として、これから、明日から何をすればいいのかということ、夢みtainな話をもう一度、ちょっとお1人ずつ話していただきながら、少し締めの方にもって行きたいと思います。

では榛葉さんからお願いします。

榛葉／私ちょうど先日、今までやってきたことのまとめと課題ということを書く機会がありまして、よくよく整理してみたのです。そうしたら、うちの学校は、残菜はゼロです。残菜というのは、食べ残しのことです。準備の時のキャベツの皮をむくとか、リンゴの外側をむくとか、そういうものは出ますが、それが週に少し、食べたあとの残りというのは、ゼロなのです。

私は教室で、教室に入って食べているのですが、全体としての残菜はゼロでも、1人1人の生徒たちは、かなりの偏食の子もいますし、小食の子は仕方ないと思います。全部バランスがとれた物を、その子は必要エネルギーがそれしかないの、それを食べて、私の中ではそれなりに結構なことだと思っています。ただ私が一番、今、これからどう取り組んでいったらいいのかと思っていることは、極度の偏食の子、本当にさっと友達に、手を出します。「牛乳をこの線まで飲もうね」と私がいうときには飲むのですが、私が教室に行かないと、さっと1本全部違う子にあげて、ほかの子はほしい子もいっぱいいます。部活の子は3本くらい黙っていれば、欠席の子の分も飲む子もいますので。差というか、アレルギーの子もいますし、肥満の子もいますし、結構な偏食な子もいますが、そういう子どもたちに、どういう手立てを持って…あまり「食べる、食べる」というのもきついですから…自分の体を先ほどの話ではないですが、18歳までの、今中学2年生のときが一番骨を作っているときですので、そういうときに、せっかく骨を作っていくものを、自分で拒否して食べないということに対して、課題を持っています。どういう手立てで、この子に、自分から食べよう、人にいわれて食べようでは、将来も食べないでしょうし。私たちは良く「自己管理能力」という言葉を使いますが、自分の将来に健康で、本当に長生き、そこには睡眠とか、健康とか、食ばかりではないことがいっぱい絡んできますが、私は食の立場から、その子たちに健康で、日本の、もしくは世界の将来を担っていくかもしれないそういう子どもたちに、健康な体を今、作るぞという意欲みたいなものを全力で伝えたい。拒絶されても。でも、学校に来なくなっちゃったら困るから、その辺は考えながら、真心で、「思いやり」という言葉が先程出ていましたが、本当に母の思いやりというか、母の心で、私がこの子の母だったらどうするんだろうという思いでいつもいるのですが、それを来年の課題にしていきたいと思っています。

北原／人間の生き方もそうですが、大きなうねりの中で、反省したり、挑戦したりして、この社会を私たちは生きているというような気がします。先程肥料を十分使いながら、農産物を作ってきた戦後の高度成長時代。私たちが子どもの頃の時代は、親たちが子どもたちに十分な物を食わせてあげたいということで、農業生産の生産力だけを上げてきたわけです。それは国と、農協も一緒になって農家に対してそういう指導をしながら、物資を供給するという立場で農業をやってきました。

その後、米なんかは、食べる量が少なくて、それは好みの文化なり、畜産分野なり、アメリカの指導の下にやらされたのかということ、怒られるかもしれないが、そういう時代が来た。そして減反となった。従って、減反が始まった時点で、もう量をとる時代ではないんだよ、より安全な農作物を作る、よりコストが安い農産物を作る、資源問題もより少ないもので、日本の農業をどう組み立てるかということに、本当は発想を転換して進まなければいけなかったのですが、なかなか、そういった指導がなかったのです。農家でああいう物の見方をするのは、まだまだ少ないのでありまして、どうせ作れば政府が買ってくれるんだから。減反面積が決まっても、その作る面積の中から。そういう中で農業展開していくわけですが、先程言ったような、世界的な資源問題。日本の農業は資源がとりづらい国で、そういうところから、農業が成り立っていることを考えたときには、もう仕方がない、健康的にもおいしい、優れた農産物を私たちは供給しなければいけないと、思っているのです。学校の皆さん方に、そういうふうに農産物を作ったら、栄養学的にこうに違います。従って、有機産物に対してもお互いに提案をしませんかというようなことができるような勉強をしてもらいたいし、それからそういうセンスを持って、研究なり、分析なり、しながら共々、郷土の子どもたちによりよい健康的な農産物を食べられるように作って頂ければなと思っております。以上です。

岩間／まず、こんな本当に新村の片隅に住んでいて、大変なことに、こんな話す機会をいただいて、ありがたいことです。

2つほど有りますが、その1つは、ここで話して良いかどうか分かりませんが、近々この近く、直売所ができようとしています。作った物、近隣でできた物、それらをそこで、今年の半ばに作りたいという提案が進んでいます。そこで、ただのファーマーズマーケットではなくて、我々の作ったおにぎりを売ってみたい。小麦で作ったうどん定食をやりたい。そんな安全な、普通のものと同じようなものですが、そういうものが提供できる小さなシステムが、一緒に連結されたらいいなということで、今、進めているところです。ということで、お願いしています。

もう1つは、せっかくこういう本当の友達同士の組織を作って、今日まで続いています。必ずや平均寿命でいきますと、私も後10数年であの世。そうした段階で、それまでの間、百姓、農業を続けながら、この今、福祉といわれている中で、そういう仲間同士が、近隣の人も交えて、福祉の施設、コミュニティみたいな、そんなものが我々の手でできたらおもしろいかなと。我々の中でも、今、農協の中にその専門家が1人見つかっています。実際にその経営を任されている人も、もう数年で退職だと思えます。その人と一緒に力を合わせながら、そんなに大かがりではなくて、我々が子どもにも見てもらえない、病院にも入りたくないというようなことから、私の近隣、近くを見ても、1人住まいの方が何人かいます。それぞれ違った場所に福祉のお世話になっていて、サービスに行っています。遠くに行くのではなくて、近くで我々の手で。自分では、そういう場ができたならおもしろいかなという思い、その2つであります。

菅野／地域が変わり、日本が変わるというのを信じているのです。だから、レインボープラン、より幅広く、深くその地域に根ざすことを進めることを通して、日本に貢献できればいいなというのがあって、達しにくいから、そんなもの何十年もかけてのことだから、俺の人生どうこうって

うのではないけど、そういう方向で生きていきたい。まず当面は、レインボープランをきちんと仕上げること。もっともっと仕上げること。ちゃんと仕上げること。農民の側からそういう立場で頑張っていきたいなと、今、思っています。

白戸／ありがとうございました。

では、これ本当に最後になります、若い人たちにメッセージを一言ずついただいて終わりにしたいと思います。

榛葉／難しいですね。そうですね。お伝えしたいのですが、立派なことは言えないのですが。先程岩間さんが、後何年と考えると、やはりあまり小さな事にくよくよしない方がいいかなと思います。それで、溶けない苦しみはないので。そのときは苦しいです。どんなことが出てくるかわかりませんが、必ず越えられると信じて、周りの人に相談しながら、ピンチはチャンスで、必ずそのピンチは、ひっくり返ればチャンスになりますので、是非チャンスにして下さい。



北原／あまり長くなってはいけないね。今私がここにいるのも、なるべくしてここにいる。皆さん方も、なるべくして、ここにいるおられるわけで、選んで生まれてきて、松本大学を選んで入ってきているということでありまして、従って、その機会をより有効に使いながら、そのときそのとき、精一杯勉強しながら生きているというのが、一番大事ではないかなと思います。

例えば、先生にいじめられた場合でも、先生はわざわざ悪役になって、私を鍛えるためにいじめてくれんだとお考えになれば、楽しい学園生活を送れるのではないかと思いますので、よろしくお願いします。

岩間／はい。今、メッセージということですが、私が思ってきたのは、その隣にいる人を仲間に巻き込むこと。熱く語って、とにかく巻き込むのです。自分の思いを語り、巻き込んでいったらどうなんだ。いきなり10人とか20人ではなくて、その辺にいる人、隣にいる人くらいに、一緒にただお茶を飲むだけじゃなくて…ことある度に飲んでいきます…夕べは夕べで、公民館で。お茶だけで本当は帰るわけです。お茶だけで、たいがいは参加された方10数名いますけれど、ほとんど帰ります。我々の仲間3人ほどは、別のところに集まって、いっぱい飲んで語るということで。あまり大勢で、最初から大勢でしない…数人で語って、同じ思いを共有するということがどうでしょう。そんな思いです。

菅野／そうですね、俺はみんなで、「柿の種」ですね。

12月くらいになると、この辺にも結構とり残したか木の実ってある？ それをやがてカラスの目にとまったりすると、ことごとく落ちたり、風が吹いて落ちたりしますよね。その落ちる直前の柿の実にマイクを向けて聞くわけよ。「今、お前の気持ちはどんな気持ちだ、教えろ」と。たぶん、柿の実は「俺には明日はない」とか、「私を取り巻く環境は非常に厳しい」とか。そして彼らが考えているように、やがてぼとぼと落ちて、柿の実の人生はだいたい終わりですよ。けども、一方で、今度は巻き戻して、落ちる前の熟した柿の実の、さらに柿の実の中にある柿の種に聞くわけです。

「きみの今の実況を教えろ」と。そうすると、今度、柿の種は、「もうじき俺の時代が始まる、希望が近づいた。芽吹いて思い切って俺は活躍するぞ」といつているに違いないのです。同じように見える時代の中でも、だめになっていくものと、その前から育まれて、新しい時代の価値観を代行して、ふくらんでいるものがあるんだよね。

俺たちは…いつも思うんだけど…百姓は非常に厳しいけれど、地方で様々な活躍する方々も今は決して恵まれた状況ではないけれども、柿の実の立場に立って泣いている。そこから希望は生まれない。柿の種の立場に立って、私たちはどのようにこの社会に参加していったらいいのかということを見つめながら生きていこうではないか。

「みんなでなろうよ、柿の種」ということをいつています。柿の種になる資格は年齢ではありません。心意気です。是非、皆さん、一緒に柿の種になるべく「俺たちもなるよ」と、そういうレッスンですね。

白戸／ありがとうございました。

まとめはしませんが、1つだけちょっとお話をさせて頂いて、これ閉めたいと思います。

僕の知り合いに村居先生という歯医者さんが、上田で歯医者さんをしている人がいます。この人は、去年の10月に定年だと、自分で年を決めて自分の診療所を閉めました。この先生はちょっと変わった先生で、看板には、「予防歯科」と書いてあります。虫歯にならない歯医者。虫歯にさせない歯医者。ですから、本人が「だから僕は貧乏なんだよ」といつていました。歯医者というのは、虫歯の治療をして、抜いて、かぶせて、削らないと、お金にならないと。でも、その先生がいつもいつていたことを、僕はああそうだなと思ったのですが、とかく歯医者口の中を見る。でも、本当は、口の中から見えるものを見なければいけないんだ。例えば子どもが虫歯になる。それは口の中を見れば、虫歯だから、虫歯を治す仕事だけれど、でもどうして虫歯になったのかということを考えていけば、食生活の問題とか、いろんな問題がある。

村居先生が診療所を閉めた理由は、「娘は自分の仕事を勝手に理解したので、歯医者にならずに栄養士になった」とおっしゃる。たぶん、それと同じことが、学生の皆さんもこれから問われるのです。栄養士としての仕事だけではなくて、そこから見えるもの、今日の話で、農業の命の循環から食を考えるといつましたが、地産地消というのは、物だけの循環ではないですよ。農産物だけの循環ではないですよ。今までの話にあったように人の循環であり、人のつながりだということだと思います。

有機農業という言葉があります。有機農業というものがあるけれども、農薬をかけないとか、そういう意味だけではない。人と人との信頼関係の中で作られていく命をお互いにいただくということです。あの人を作っているから安心だ。何かこう、政府が決めた基準があって、だから有機農産物ではない。その部分を、そういうことを、皆さんにも是非、大事にして頂きたいなと。

専門家というのは、どうしても目の前の自分の専門に閉じこもりがちになるといつます。僕も自分の学科で、福祉士を育てることでありますが、福祉だけを考えると、本当にせまい社会になっていくのです。地域や世の中を見ながら、是非育っていつてほしいなというのが一点です。

それからもう一点。それと関係があると思うのですが、人はたぶん1人ではできることは少ないのではないかといつます。今日、お話になった皆さんも、一緒にやる仲間がいるという話がいつつか出てきたといつます。学生時代は1人でもできることがたくさんありますが、社会に出ると、1人でできることはほとんどないです。誰かと一緒に協力したり、一緒につながってやって初めて、世の中が変わる。1人で大きな声で騒いだからといつて、世の中は変わらないです。菅野さんが地道に自分の地域で生ごみを堆肥に変えていくことから、地域を変えていくというお仕事をされているように、皆さんも是非、そういうふうになってほしい。またそういう、今度は皆さんが学校やいろんな現場に行ったり、あるいは自分が親になったときに、そういう次の世代を、そのように育て

て頂きたいと思います。

スーパーに行って、100円の椎茸と199円の国産の椎茸が並んでいたら、100円が安くて国産が高いと思う子どもではなくて、199円の椎茸が普通で、100円が安すぎる。これは先程から、話があったようにどうもおかしいのではないか。そうすると、今日のような貿易だとか、いろんな矛盾が見えてくる。そういうような視点を持って、是非頑張っ頂きたいなと思います。

ということで、多少5分ほど、早いのですが、早いに越したことはありませんので、この辺でこのシンポジウム、パネルディスカッションを閉じさせていただきます。最後にパネラーの皆さんにちょっと拍手をお願いします。

廣田／今日のパネルディスカッションを進めてくださいました、コーディネーターの白戸先生とパネリストの4名の方々に、心よりお礼申し上げます。

健康栄養学科の学生もやっあと1年勉強したら、社会に出ていく事になるわけですが、みんなが出て行ったら何か少し地域が変わってきたな、そんなふうな地域の力になれる、そういう卒業生を送り出したいと私は思っています。

皆さんは、私の柿の種なのです。私ももうちょっと頑張ってみようと思います。ありがとうございました。